

1 地上の星 9位 2光年

天に星、地にホタル。星と星の競演。

レイアウトもきれいで、さらりと幻想的な光景を見せて、とてもこちよい今週の表紙作品でした。

2 ぷらねっとおぶじあーす 5位 5光年

かわいらしさとカチカチの科学文体の対比を楽しみつつ、ひとつひとつのイベントがきれいにシンクロして、わけて、くしゃみによる生命誕生にニヤリでした。ぼーるの行く末やいか

に？
イチオシフレーズ：「きんがぼーるについている」

3 キラメキ戦士スター☆マン 4位 6光年

一場の喜劇。コミカルに演出して、特にラストのどんでん返しが効いています。

どっちが正常で、どっちが変態か、なんて、いともカンタンにひっくり返ってしまうものなのさ、という人生哲学の開陳と読んでみたのですが、ちがうのか？

イチオシフレーズ：「スター☆マン、参上！」×3 「必殺！スター☆マンビーム！」でイチオシフレーズ大賞の連続受賞となりました。ぱちぱちぱち。

4 ある信者の話 5位 5光年

星占いに絡め取られた人生の哀切。たんたんとした筆致のおかげで、かえって行間から姉（だったんだ！）の妹へ寄せる思いがあふれ出してくる感があって、ラストの墓石でずしりと来

ます。
ストーリーテラーさん面目躍如のアレイズ復活おめでとう。
イチオシフレーズ：「縁起のいい～～花を供えた。」

5 帛琉 9位 2光年

読めそうにないタイトルって不親切だなあ。ふりがな下さい「パラオ」って。

おなじみウンチクコラムニストさん登場なのですが、今回はバランスが悪い感。国旗における天体観測がパラオトークにシフトしたかと思ったら、ラストは世界平和でちょっと強引にシメ。盛りだくさんな詰め合わせだけれど、やはりぴしりと

筋の通った主張が欲しいです。

6 星の記憶 8位 4光年

ここぞ！ と壮大なストーリーのすべてを圧縮して叩きこんだ趣。

濃厚です。1行1行の背後に激しいドラマが感じられます。

ただ時代設定があいまいで、イメージとして具体化しにくい。砂塵とあるので、いちおう古代中国テイストで読んでみたのですが、そうですかガンダムですか。

7 鋼鉄男爵伝説 3位 8つ星レストラン

わはははは。突飛な設定に爆笑。ハッピーエンドでハッピーハッピー。

とりわけ、星が男爵に降り注ぐクライマックスシーンの鮮やかさがすてきです。作者さん自身が驚いておられましたが、とにかくおもしろかった！ というみんなのキモチがこの順位になったのだと思います。

8 farewell star 2位 9つ星レストラン

4と対比すると、また興味深く読めます。ともにみごとなストーリー展開ながら、あちらは兄、じゃない姉から見た視線でたんたんと、に対し、こちらは一人称でぶちまけられる野球人生の哀切と、語る〈温度〉が全く異なります。

一人称トークだから、「なあ、こんなに白球があるのに、どうして・・・」といった熱く語られる慟哭が読者の胸中でストレートに炸裂するのでしょう。

ときに「彼女」＝姉、と読んだのですが？

9 間違い 5位 5光年

そんなソコツなタコ宇宙人。

これは、サンプル一つでモノゴトを決めちゃあいけませんぜ、という理系的メッセージと読んじゃ……いけないのか。さらっと書き流したようでいて、けっこう票が来て、よかったよかったの新人コラムニストさんでした。

イチオシフレーズ：「打ちました ←銃で撲るな！」「うらめしや～、うらめしや～」

10 星に願いを 1位 14星ホテル

レイアウトで作者バレしますよ。

猫、ずるい、猫。動物モノで読者の涙腺直撃です。最終段落なんて、涙で文字がかすんで読めません・・・

ずっと一人称トークなので、二箇所ある客観描写が邪魔な感

があったのですが、どうでしょう。

いずれにせよ、作者バレものともせずの圧勝首位、**おめでとう!!**

イチオシフレーズ：「にゃーん」

惜しい1 "Marionette"

星空のマリオネット。抗いのようなない運命。きちっと哲学を背骨としたストーリー展開なのですが、けっきょく一馬の抵抗なんか空しいのさとくくるのか、いや、と展開するのか、作者さんのスタンスをもっと明快に見せたかったところ。

惜しい2 職場：星の海 年収:不定

硬質な文体で宇宙海賊。熱光学迷彩とか、こまかにはめこまれた細部に支えられて臨場感ゆたかに中尉の思いが伝わってきます。ボン・ボヤージュと送り出したい今週の読み納めでした。

“Marionette”

「キミは、自分のことを「人形」だと思ったことは無い？この星―地球というステージの上で、ただ決められた役割を演じるだけのマリオンネット。でも、人が人に与えられた役割をこなすことは、とても素晴らしいことなんだ。問題なのは、その役割が、たった一つの「何か」のたった一つの「目的」に向かうための「手段」なんじゃないかということを、君自身が一度だって考えたことがあるかどうか、だよ。」

そう、キミが誰かを愛することだって、本当は「何か」の計算の上かもしれないよ？

午後十一時二十分 泉境付近 トネル入口

「キミはもう気付いていいんだよ。キミ自身の役割に。そしてその背後にある、巨大な『意思』に」

頭の中で誰かが囁く。

「またコレか。」

一馬は起き上がると、何かを噛み締めるような険しい顔をしながら、脇にあったタバコを一本取り出し、火をつけた。煙を吸いながら、眼下の車の通りを見つめていた。

一馬がこんな夢を見るのはこれ一度ではない。いや、四六時中、起きているときでさえその『声』は聞こえてきた。一馬は仕事も何も手に付かなくなり、一馬はそれから逃げるように、半ばホームレスに近い状態で各地を転々としていた。

「私たちは、そんな『意志』を、ちよつとだけ早めてあげるの。それはちよつと難しいけど、底抜けに明るい喜劇」

「コレも、誰かの意思…なのか？」

一馬は小さくそう呟きながら、寝転がって、暗闇の中満天の星空が光っているのを眺めながらまた眠りにつこうとしていた。

「はじめまして、一馬さん」

「！？」

一馬が声のした方に振り向くと、そこに一人の少女が立っていた。白いワンピース。少しウェーブのかかった金髪。そして、首から提げた懐中時計。

その少女を、一馬はよく知っていた。

「…はじめまして、だど？今さら、何の用だ！？」

「もうそろそろ、頃合だと思つて、ね」少女は後ろを向いて続けた。

「…『干渉』したのは悪いと思つて。でもね、時間が無いんだよ。邪魔するやつがいてさ。」

で、私の言ったこと、分かってくれた？私に付いていく気になった？」

「一つ聞く、お前の目的は何だ」

そう言われると少女はまるでバレエのダンサーのように、キュッと一馬の方を向き、大きく手を開いた。

「終わりだよ。この星の物語は99億年かけて、ようやく今クライマックスに向けて動き出した。私たちも、人間も、他の生物も、物理法則も、全てこの物語を終わらせるためにプログラムされた、一つのオブジェクトなんだ。私たちは、それをちよつとだけ早める、それが目的」

一馬は黙ってしまった。自分の運命を狂わせたモノが眼前にいるにもかかわらず、何も出来ないでいた。少女の話があまりに荒唐無稽な

のもそうだが、それ以上に一馬は、少女にある種の「神々しさ」を感じていた。それが、一馬に「言うこと」を忘れさせたのだ。

しばらくの沈黙。やがて少女は耐えきれなくなったのか、小さく「ダメかあ」と呟くと、しばらく横を向いて何かを考えるそぶりをした。やがて、急に手をボンと叩くと、何かを思いついたような目で一馬の方を見やった。

「そうだ、これからキミ自身の未来を見せてあげる」

そう言うと、少女は一馬に向かって手を突き出した。

刹那、一馬の脳裏に、途方も無い量の『意識』が流れ込んだ。

「うわあああああつ！」

一馬はさっきまでの落ち着きを完全に失った。足はガタガタと震え、顔は血の気が引いていた。もはや立つこともままならず、倒れるようにその場にしがみこんだ。

「…そんなこと、あるはずが無いっ！俺がこんなことっ！」

「それが、この星が君に与えた『役割』なんだよ。そして、その『役割』を演じる時が必ず来る。それは、この世界のタイムライン上に載せられた、この星の『意思』なんだ。」

「そして、キミはそれが『出来る』。なぜなら、キミは私と同じだから」

一馬は溢れる感情を抑えるのに必死だった。恐怖、不安、あらゆる感情が一馬の中を掻き回した。

「これが…意志だつて…！？」

やがて、一馬の中の様々な感情が一つの大きなモノにまとまった。憎悪。

一馬はキツと少女を睨むと、懐に持っていた銃を少女に向け、引き金を引いた。

弾丸は少女の右目を貫いた。同時におびたらしい量の血が噴出し、辺りを赤く染めた。皮膚は飛び散り、右目の残骸が遠くに転がった。一馬の眼前には、さっきまで少女だったはずの死体が笑っていた。「畜生ッ！」

一馬はそう吐き捨てる、暗闇の中へ逃げるように立ち去った。

その様子を、高台から眺める一つの影。

それは小さく「クスッ」と笑うと、後ろを向いて歩き出し、そして消えた。

首に提げた懐中時計が、星空の明かりで光っていた。

職場..星の海 年収..不定

……仕事の時間が近づいてきた。自室で仮眠を取っていた俺は艦橋に上がる。艦橋とは言うものの、巨大な戦闘艦ではないのでそんなに遠くもないし、広くもない。

お世辞にも広くない居住区画を抜けて階層を移動すればもうそこは艦橋の前。少し軋んだ音を立てながらドアがスライドすると、艦橋にいる奴等の視線が集まった。一部の人間が軽く敬礼をしてきたので、俺は適当に答礼する。

モニターに船影はなく、そこにはすべてを呑み込む虚空の背景とそこに散りばめられた無数の光点が映し出されているだけ。見飽きてどのぐらい経ったかとも思い出せない。旧時代の人間はどうしてこんな退屈な光景に様々な思いを馳せることができたんだろうか？

「旧時代だったら、これを星の海とでも表現するんだろうか……」

「俺達は星の海でお仕事ですか？ そいつはロマンチックなことだ」

俺のとりとめもない呟きに、からかうような通信兵の声が応える。

「素敵な職場環境、良い事だ。これで年収が安定していれば言うことなしだな」

しかし、俺達にとつてそこは職場でしかない、そしてそれと同時に――

「目標を補足、どうしますかね中尉？」

「とりあえずその名前と呼ぶな、俺は元中尉だ」

古びた軍服の胸元、未だ残る錆びついた階級章を見つめながら自嘲気味に答える。

そう、俺は二年前まで軍に所属していた。

秩序を守りたい――その一心で士官学校に入學した俺は、同じ夢を見る仲間と語り合い、しごきとも言える教官達の訓練を耐え抜き、やつとの思いで辺境惑星への赴任までたどり着いた。これで俺も秩序を守る仕事の一端を担えると思っていた。

しかし、そこには俺の思い描いていた軍の姿などなかった。賄賂など当たり前のように横行し、通過する貨物船から通行料まで取り立てるその横暴さは私兵、いや、海賊と変わらないその実態に俺は激しく失望した。軍に一生を捧げるといふ目標を捨てた俺は、中尉に昇進したその日、軍を脱退した。というより、それは脱走に近いものだった。

そのとき退職金代わりに頂いたこの機動艇も、今では立派な商売道具。荒仕事のおかげで生傷の絶えない奴だが、これまで止まることなく無事に航行してくれている。

そこらの恒星と見間違えるほどの大きさにしか見えなかった目標が、本来の直方体に形を変えてモニターに迫っている。実際は *1km* 近くある船体が徐々に質量感を帯びていく。

「通信を開け、あちらさんにご挨拶だ」

目標に逃げられないよう充分接近した上で熱光学迷彩を解除、通信回線が開かれる。軍用艇が忽然と現れたことに戸惑っている貨物船の乗員は強張った顔でモニターに映る俺の顔を見ているんだろう。

「こちらは海賊だ、これより貴艦に強制接舷を行う」

強制接舷という名の体当たりを宣告した俺は不敵な笑みを残して通信を切断した。

この宇宙に正しいものがないのなら、俺がどこまで堕ちたって誰も文句を言わないだろう。たとえ秩序を守ることに命を懸けようとしていた俺が、無秩序の象徴である海賊に成り下がったとしても……